深谷 幸子：「藻類談話会」参加記

2001年11月10日（土）「藻類談話会」が甲南大学平生記念セミナーハウスにて開催されました。近畿，四国，中国地方から約50名以上の方々が参加されました。発表者（敬称略）と講演題目は以下のとおりでした。

長里千香子（北大・北方生物圏）：褐藻植物の細胞分裂－中心体の働きに焦点をあてて
山中理央・中村薫（京大・化研）：藻類を利用した光学活性化合物の合成
大塚泰介（琵琶湖博）：珪藻群落の季節変動の解析
永瀬裕康（阪大院・薬）：微細藻類を利用した環境浄化
長崎慶三（水産総合研セ・瀬戸内海水研）：有害赤潮藻とウイルス－赤潮はなぜ消える?

発表内容は大変多様で，講演がひとつ終わるごとに次の講演に気持ちの切り替えを要求される大変忙しい（？）ものでした。プログラムをごらんになると分かりますがまず長里さんの非常に精致な構造観察に基づいた褐藻類の分裂・生殖・発生についての話題提供が終わったかと思えば，山中さんの微細藻類を触媒として扱うことで光学活性化合物を合成させるといった化学的で物質生産という産業に直結するような話題。次には大塚先生による珪藻の個体群変化を，正確にしかも感度良く把握するためにどのように視覚的に表すかといった現場の情報に基づいた生態的な話題。そして永瀬先生による環境浄化に役立つ可能性のある特性による微細藻類のスクリーニングとその利用の話題。そして最後は，長崎先生により赤潮藻が大量発生した後の消滅に，ウィルスが有効に関与し海洋プランクトンの群集変動の新たな理解について紹介され，すべて藻類が研究材料になっていることは共通していますが非常に多彩な発表が続きました。また参加された方々もプログラム同様さまざまな分野の方のようで講演に対する質問も大変活発なものとなり，講演時間を延長してディスカッションが続く場面も何度かありました。講演終了後はセミナーハウス内で懇親会となりました。今回の会場は講演が行われたホール，懇親会場，宿泊施設が１つの建物の中のため，全てのプログラムが連続して進んでいきました。講演時間内では語りきれなかった議論が懇親会場に移り宿泊ロビーに移ってとぎれることなく深夜まで続きました。講演内容については質問が質問を呼び，とても興味深い議論に発展していきましたが，ここでは講演内容についてはあまり多くは触れずに，懇親会の中で私が一番考えさせられた談話会の意義について報告させてください。

それは「藻類談話会の意義とはなにか，それは分野の異なる研究者が互いの交流を深めることにある」と徳島大の楠見先生がおっしゃったことに始まりました。また，それぞれ自分の専門から離れれば一般の人と変わりはないのだから，談話会の発表者はそのことを意識してスライドや話を組み立てていかなければ内容はなかなか伝わらない。そして藻類談話会は普段の学会とは違ったプレゼンテーションを試みるいい機会であるとお話下さいました。この話を聞いて，私はナルホド！と思いました。確かに同じ内容の話でも相手が変われば使う言葉や表現が全く変わってくるはずです。学会で発表した内容を，たとえば新聞記者にするとしたら，中学生にするとしたらどのような言葉を使うか，考えをめぐらせると思います。そういう視点で今回の発表を思い出してみると，講演のイントロには教科書にあるようなイラストを持ってこられていたり，使われている言葉も私でも内容にすぐ入っていけるような一般的な言葉が多く，身振り手振りを交えた発表をされていた方もいらっしゃいました。実際，自分のプレゼンテーションを振り返ってそういう工夫をもっと積極的にとりいれていかなければと，目の前が開けるような思いがしました。

私は今回の参加が初めてでしたが講演や懇親会違う分野の方々との交流などとても有意義な時間を過ごせたと思います。また次回も是非参加させていただこうと思っています。

（甲南大院・自然科学・生物）